茨　城　大　学　学　報

第276号
平成19年12月～平成20年1月

整備の進むキャンパス

INDEX

◆平成２０年　学長年頭挨拶
◆農学部研究室訪問交流会を開催
◆工学部研究室訪問交流会を開催
◆キャンパス周辺の地区一斉美化清掃に参加
◆国立大学法人総合損害保険に関する講演会を開催
◆事務局消防訓練を実施
◆留学生のための茶道体験を実施
◆青山和夫教授（人文学部）が日本学術振興会賞を受賞
◆留学生がそば打ち体験に挑戦
◆学生地域参画プロジェクト実施報告会の開催

茨城大学総務部総務課広報係
TEL 029-228-8008
FAX 029-228-8019

◆平成２０年年頭挨拶

希望と可能性の年に　－平成２０年を迎えて－

平成２０年１月７日
茨城大学長　菊池　龍三郎

新年明けましておめでとうございます。

教職員のみなさんには、お元気で新しい年をお迎えのことと思います。

昨年は、大学のそれぞれの部署、それぞれの立場で茨城大学の運営にご努力、ご協力をいただき心から御礼を申し上げます。とりわけ昨年は、秋以降、大型改修４事業が始まりました。学生はもとより教職員のみなさんにご不便をおかけしておりますが、大変にご理解、ご協力をいただいております。予定された期限での終了を目指して、現在、改修工事は順調に進行しております。多くの老朽施設を抱える本学にとって、少しでも良好な教育研究環境を整備することは喫緊の最重要課題です。国の財政は相変わらず厳しい状況下にありますが、私たちもなんとかこの流れを切らさないように、引き続いて最大限の努力をしたいと考えております。

さて、本年、私たちが取り組まなければならないいくつかの重要な課題について申し上げておきます。

まず今年は、第１期中期目標期間に関する、いわゆる暫定評価が予定されていることです。これは、平成１６年度から１９年度までの業務達成状況をもって第１期全体の評価とするものですが、特に平成２０年度は、１９年度の評価に加えて、４年間全体の達成度はどうかといった２つの観点での目配りと準備が必要になります。この際、平成１９年度までにやっておかなければならない課題や項目については、今年度も残すところあと３ヶ月ですが、確実に評価されるようチェックと実行をお願いしたいと思います。

今年は、この他にも本学にとって大事な課題が目白押しであります。

まず、学部教育の充実に向けての改革が緊急の課題となっております。全入時代に入り入学者の学力の低下等が進む中で、深刻化する大学教育の空洞化傾向に歯止めをかけ、教育の実質化を図ることは今やわが国の大学教育共通の課題であるといえます。このため、国も平成２０年度予算において、学部教育の充実をはかるＧＰ予算を大幅に増加しています。本学としても、是非ともいいプログラムをいくつも企画して申請したいと思います。

ご承知のように、昨年は、本学の大学教育センターが申請した特色ある大学教育支援プログラム「確かな学力の向上を目指す理系基礎教育」が高い評価を受けていわゆる特色ＧＰに採択され、全国的に大変に注目されております。今年も引き続いてＧＰに採択されるようなすぐれた実践が全学的に出てくるよう協力をお願い致します。

次に大学院改革があります。これに関しては、かなりの時間をかけて検討をしております。現在、大学院インフレといわれる時代にあって、社会が求めるニーズの的確な把握に基づき、各研究科の人材養成の目的をより明確にすることが強く求められております。本学としても、こうした方向性を確実に踏まえながら、同時に茨城大学としての大学院改革の特徴をよりアピールできる計画を打ち出したいと考えております。

大学院改革に関連しては、昨年、農学部が申請した大学院教育改革支援プログラム「地域サステナビリティの実践農学教育」がいわゆる大学院ＧＰに採択されました。前回採択されたＧ

Ｐにおける地域レベルでの実績を踏まえて、今度はグローバルなレベルでの展開を目指したプログラムであり大いに期待されます。是非、他の研究科でも続いてほしいと期待しております。

続いて本学における研究の展開に関しては、昨年、「茨城大学の研究推進方針」を策定しました。重点研究分野として、①総合大学における文系から自然系に至る研究の萌芽的研究を含む様々な研究のいわばインキュベーターとしての基盤的研究分野、②応用原子科学やサステイナビリティ学等の「特色ある研究分野」、③地域研究を進めることにより新しい社会形成を目指す「地域連携・社会連携研究分野」の３つを挙げました。なお、「特色ある研究分野」のうち、「サステイナビリティ学」に関しては、ご承知のように、東京大学を基幹大学としてスタートした「サステイナビリティ学連携研究機構」（ＩＲ３Ｓ）の正式メンバーとして、一昨年に「茨城大学地球変動適応科学研究機関」（ＩＣＡＳ）を設置し、既に活発に活動を展開しております。さらに、応用原子科学研究に関しては、現在東海村に建設中のＪ－ＰＡＲＣ（大強度陽子加速器施設）において、茨城県から委託を受けた２本のビームライン（ＢＬ）の運転・維持・管理および開発研究に関連して、これを本学にとっての今後の発展の重要な起爆剤とするため、この４月には、これに関連する全学的、総合的な研究機関として、「茨城大学フロンティア応用原子科学研究センター」の設置を目指しております。

国立大学の将来に影を落としているのが財政問題です。効率化、人件費削減、地域手当等の経常経費の増加を見込まなければならない一方で、収入の方は、例えば学生納付金に関しては、今年から入学者数に厳しい抑制ルールが導入されるため、財政面から見ればさらに厳しくなることが予想されます。そうした中でのひとつの解決策としては、外部資金を増やすことが急務です。全国的に見ても、各大学とも教員研究費はしだいに削減せざるを得ない状況になってきています。本学でも現状を打開するひとつの方策として、特に科学研究費補助金の申請者を増やす努力が今年も必要であります。そうした中で、外部資金に関しては、すでにご承知のとおり、この数年、大型の研究資金がかなり増加していることは特筆できます。さらに共同研究開発センター等の努力により共同研究、受託研究等の件数も大幅に増加してきているのも心強い傾向であると思っております。

本学の外部資金の獲得に関連しては、もうひとつ、地域連携における活動をあげなければなりません。教職員のみなさんのご支援、ご協力によって、地域連携推進本部や各学部が展開している地域連携の活動は相当な数にのぼり、地域社会における認知度、そして評価は今やきわめて高くなってきております。「地域に支えられ、地域から頼りにされる大学」をモットーに掲げている本学としては、今年も、地域社会における存在感をより高める努力を進めていく必要があると考えており、その点でも学生や教職員のみなさんには今年も特段のご努力、ご協力をお願いしたいと思います。

なお、以上の課題と関わって、第２期中期計画の策定作業に入るため、昨年１０月に「茨城大学総合計画委員会」を立ち上げました。今後、積極的に計画策定作業を進めますが、その間、教職員のみなさんの大学改革、大学づくりへの様々な思いや願いを、積極的に計画策定に反映させる努力を進めていきたいと思います。

これから、財務部を中心として、平成２０年度予算の編成作業に入りますが、厳しい財政状況の中にあっても、本学の希望と可能性を広げられる予算にしたいと考えており、教職員のみなさんのご理解とご協力をお願いいたします。

最後に、今年１年の教職員のみなさんのご健勝を心から祈念して新年のご挨拶といたします。

◆農学部研究室訪問交流会を開催

平成１９年１０月２６日（金）午後２時から、茨城産業会議（茨城県商工会連合会、茨城県商工会議所連合会、茨城県中小企業団体中央会、茨城県経営者協会）との連携事業として、つくば食品フォーラムの後援を得て「農学部研究室訪問交流会」を開催しました。

この事業は、農学部の有する各種の研究成果や技術情報等を提供し、産業界の振興に資することを目的として平成１６年度から実施されているもので、今回は企業関係者等２８名の参加を得ました。

訪問会は、山形耕一副学長及び松田智明農学部長の開会挨拶に始まり、朝山宗彦准教授による「光合成微生物における光応答性遺伝子発現調節機構」についての研究発表が行われ、続いて、参加者を３グループに分け、ツアー形式による４つの研究室の見学と附属フィールドサイエンス教育研究センターの研究活動内容についての説明を行った後、研究室の自由見学を行いました。

最後に、企業関係者等及び大学関係者で交流会を催し、茨城産業会議の糸賀寿茨城県商工会連合会専務理事の挨拶、茨城大学の太田寛行農学部評議員の乾杯の後、産学官の情報交換を行い有意義な時間となりました。

研究発表の様子

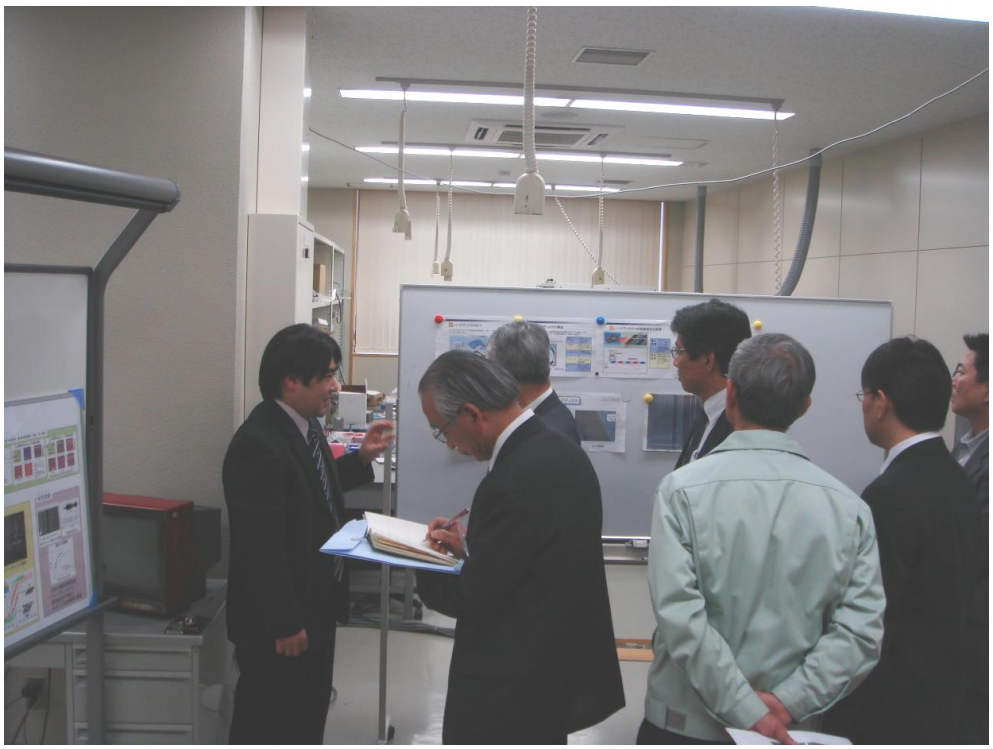
◆工学部研究室訪問交流会を開催

平成１９年１１月１６日（金）午後２時から、茨城産業会議（茨城県商工会連合会、茨城県商工会議所連合会、茨城県中小企業団体中央会、茨城県経営者協会）との連携事業として、ひたちものづくり協議会との共催により「工学部研究室訪問交流会」を開催しました。

この事業は、工学部の有する各種の研究成果や技術情報等を提供し、産業界の振興に資することを目的として平成１５年度から実施されているもので、今年度は企業関係者等５１名の参加を得ました。

訪問会は、菊池龍三郎学長及び白石昌武工学部長の開会挨拶に始まり、塩幡宏規共同研究開発センター長による「大学と企業の共同研究」に関する説明、新村信雄教授による「Ｊ－ＰＡＲＣにおける中性子ビームの産業利用の展望」についての講演が行われ、続いて、参加者を２グループに分け、ツアー形式によりそれぞれ４つの研究室の見学を行った後、研究室の自由見学を行いました。

最後に、企業関係者及び大学関係者で交流会を催し、茨城産業会議の関正昭茨城県中小企業団体中央会専務理事の挨拶、ひたちものづくり協議会の森秀男日立商工会議所副会頭の乾杯の後、産学官の情報交換を行い有意義な時間となりました。



研究発表の様子

◆キャンパス周辺の地区一斉美化清掃に参加

本学では、水戸キャンパス地区で１２月２日（日）に地元周辺の自治会・町内会主催の「地区一斉美化清掃の実施」と共に、菊池学長を始め教職員並びに学生約４０名がボランティアとして参加し、キャンパス周辺の一斉清掃活動を実施しました。

例年恒例になっている清掃活動で、キャンパス外の周辺の道路のゴミや空き缶等の撤去、除草及び落葉の分別収集を行い、地域に開かれた大学として、地域住民との連帯感を醸成することにも繋がる行事となりました。

また、 清掃終了後には菊池学長から、参加者に対しねぎらいの言葉と、日頃から地域住民との連携を大切にし今後も積極的に参加して欲しいとの挨拶がありました。

清掃作業に参加するボランティア

◆国立大学法人総合損害保険に関する講演会を開催

茨城大学危機管理室では、国立大学法人総合損害保険に関する補償制度の理解および危機管理意識の向上を目的として、「国立大学法人総合損害保険に関する講演会」を去る１２月３日（月）に理学部インタビュースタジオを会場として開催しました。日立・阿見キャンパスをバーチャルキャンパスシステムで結び、８０名を超える教職員が聴講しました。

講演会は、小澤総務課長から講演会開催の趣旨や現況の説明があり、引き続き、本学とリスクマネージメント全般に係る支援業務委託を結んでいる共立インシュアランス・ブローカーズ(株)の宮守康夫氏を講師として「損害保険で何が補償されるのか」をテーマに講演がありました。

損害保険の必要性、基礎知識、保険の種類、事故報告のあり方等について、事故発生時の対応や学生の事故事例等を交えた講演でした。講演後に「学生の学外研修時の事故」「学園祭におけるリスク」「保険金の仕組み」に関する質疑応答がありました。

この講演会は、法人化後に抱えることとなった大学のリスクと損害保険で保障される範囲を学び、危機管理、不測の事態への対応、保険補償の仕組み等を学ぶ機会となりました。本学では、今後も危機管理に関する職員研修を定期的に開催する予定でおります。

講演を行う宮守康夫講師

◆事務局消防訓練を実施

本学では、平成１９年１２月６日（木）火災予防の一環として防火意識の高揚を目的とした消防訓練を実施しました。

水戸市消防本部の協力の下、火災発生を想定しての総合訓練、屋内消火栓操作訓練、消火器操作実地訓練及び防火思想普及のための講話並びにビデオ上映が行われました。

年末の多忙な時期での開催でしたが約１５０名の教職員・学生が参加し、空気が乾燥し火災が発生しやすい季節でもあり、参加者は真剣に火気の取り扱い、並びに、非常時の対応を訓練しました。

炎にむけて消化器で消火作業を行う職員

◆留学生のための茶道体験を実施

農学部では、去る１２月２０日、留学生を対象とした茶道体験講座を講義棟１０４講義室で実施しました。

この講座は、毎年、留学生教育に理解と支援をしていただいている地域の茶道講師を招き実施しているもので、今回は、３回目の開催となります。

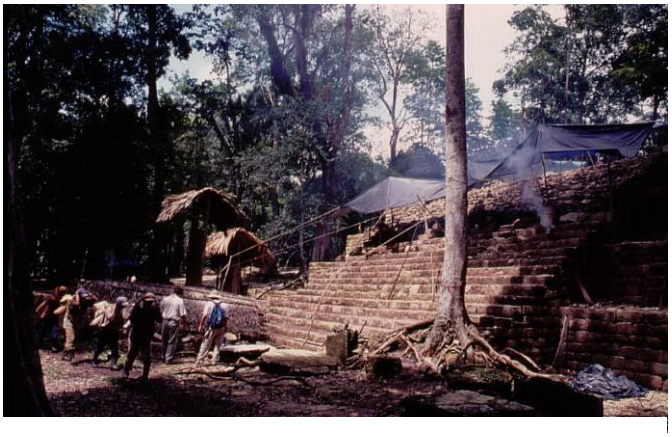
体験講座では、留学生 12 名の参加があり、講師から茶道の精神、歴史等についての講義を受け、手前の手ほどきを受けた後、初心者向けの盆手前を体験しました。初めは、難しい袱紗さばきや茶筅通しにぎこちない様子でしたが、回を重ねるうちに上手になり、最後はすばらしいお手前ができるようになりました。

留学生達は、日本古来の茶道の精神や作法を知ることで「おもてなし」の心を学ぶことができ、日本文化の一端を体験できたことに興味をもつ機会となったようでした。

手ほどき受ける留学生

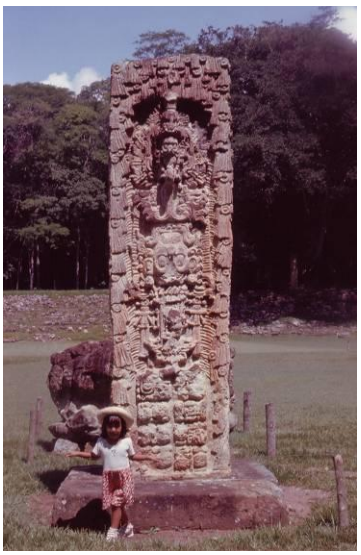
◆青山和夫教授（人文学部）が日本学術振興会賞を受賞

この度、人文学部の青山和夫教授（マヤ文明学、メソアメリカ考古学、文化人類学）が第 4 回日本学術振興会賞を本学教員としては初めて受賞しました。受賞対象の研究は「古典期マヤ人の日常生活と政治経済組織の研究」です。日本学術振興会賞は、我が国の学術研究の水準を世界トップレベルにおいて発展させるために、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者（45 歳未満対象）を顕彰し、その研究意欲を高め研究の発展を支援する必要から平成 16 年度に創設された賞で、日本学術振興会が選考を行います。同賞の対象分野は人文・社会科学系、理工系及び生物系の 3 分野で、第 4 回の被推薦者数は 415 名で、受賞者数 23 名（そのうち人文・社会科学系は 5 名）の中の一人に選考されました。



アグアテカ遺跡の神殿ピラミッド

青山教授は、国際的な舞台で活躍しているマヤ文明学の日本人考古学者の１人であり、特にマヤ石器の使用痕研究の第一人者として国内外で知られています。マヤ文明は従来、神殿建築、マヤ文字、石彫、土器などを中心に研究が進められてきましたが、マヤ文明の豊富な情報源である石器の研究は十分とはいえず、肉眼や低倍率の顕微鏡による観察に留まっていました。青山教授は、ホンジュラスの世界遺産コパン遺跡、ラ・エントラーダ地域、「マヤ低地のポンペイ」として名高いグアテマラのアグアテカ遺跡などで国際共同研究を行い、出土した石器に残る微細な傷跡（使用痕）を高倍率の金属顕微鏡を使って分析し、そのデータを既存の知見と重ね合わせて、古典期マヤ国家における石器の交換網、日常生活や手工業生産の実態、政治経済組織、国家の盛衰と戦争の関わりなどについて、新たな知見を提示してきました。青山教授の研究により、マヤ文明が「神秘的な謎の文明」という俗説が修正され続けています。マヤ文明が、石器を主要利器とする発達した都市文明であったことが、具体的データに基づいて解明されつつあり、今後さらなる研究の進展が期待されます。



コパン遺跡の石碑

◆留学生がそば打ち体験に挑戦

農学部では、去る１２月２８日、留学生、チューターを対象に松田智明農学部長、小川恭喜学生委員長始め関係教職員が参加して、農学部生協ホール等を会場にしてそば打ち体験を実施しました。

当日は、中国、インドネシア、バングラディッシュ等の留学生２２名、日本人学生１５名、教職員２３名と多数の参加があり、最初に松田農学部長から、「農学部としては初めての試みであり、そば粉は、附属フィールドサイエンス教育研究センター産のものを使用し、留学生担当職員が尽力してくれた。」などの挨拶がありました。

次いで、地域から応援に駆けつけてくれた２名の講師の紹介の後、実技指導が始まりました。先ず、講師がそばつゆの作りから、こねる、のばす、きる、ゆでるなどの一連の工程のデモストレーションに続き、参加者は、用意された６卓のテーブルに分かれ、講師に手ほどきを受けながらそば打ちを体験しました。

講師からは「初めてにしては良くできた。」と評価があり、留学生からは「日本文化を体験でき良かった。良くできた。機会を設けてもらったことに感謝する。」等の言葉が聞かれました。年末のそば打ち体験会は留学生にとっても、農学部にとっても、非常に有意義なコミュニケーションの場となりました。

そば打ちを体験する留学生

◆学生地域参画プロジェクト実施報告会の開催

去る１月１６日（水）に、今年度で３回目となる「学生地域参画プロジェクト実施報告会」を茨苑会館を会場として開催しました。このプロジェクトは社会連携事業会の支援を受けて、学生自らの企画により実施されたもので、今年度は１２件の申請の中から採択された１０件について活動報告が行われました。

午後２時からのプレゼンテーション開始と共に、地域の方々との連携による貢献度や研究成果の結果報告、また実施後の反省を踏まえ次年度に向けての改善方策等について、熱い思いを披露しました。ほぼ全員がパワーポイントを使用してのプレゼンテーションを実施し、報告内容の充実もさることながら、プレゼンテーション技術の向上には目を見張るものがありました。

また、報告会終了後に実施した「学生表彰」の対象となる優秀プロジェクトの選考審査会において、理学部「筑波山～霞ヶ浦周辺を対象とした地域振興を目標とする地質情報活用プロジェクト」が選出されました。

代表者		連携先	プロジェクト名	支援予定額（円）
所属	氏名			
教育学部	吉田幸恵	水戸市教育委員会	茨城大学教育学部キッズ･クラブ実施プロジェクト	252,000
理学部	小峯慎司	茨城県霞ケ浦環境科学センター、（株）サイボックステクノロジー、ジーエスアイ（株）	筑波山～霞ケ浦周辺を対象とした地域振興を目標とする地質情報活用プロジェクト	345,000
人文学部	藤山彩香	元茨城大学非常勤講師、茨大近辺在住の水戸市民の方々	茨大･みと　再発見ー地域国際ふれあいナビ　from　茨大プロジェクト	278,000
教育学部	王　明　江	水戸市民及び水戸市国際交流センター	餃子で交流プロジェクト	326,000
人文学部	岡　沙織	特定非営利活動法人平沢歴史文化財フォーラム	平沢3号墳発掘調査～夫の遺志を受け継いだ、未来へ託す保存プロジェクト～	188,000
農学部	川島隆行	茨城県稲敷郡阿見町上長地区・うら谷津再生プロジェクト	荒野のカボチャプロジェクト	85,000
農学部	新槙実広	茨城県立医療大学	緑がつなげる心の和	136,000
工学部	足立秀樹	（株）小峰製作所、（株）カドワキ、（株）河村製作所、（有）砂押精工 、（株）日立ゲージ工業所、（株）日立産機システム、（株）アート科学、（株）日立製作所オートモーティブシステムグループ	Formula-SAE部の活動を通して、地元企業からの技術伝承	366,000
工学部	上江洲智政	大洗町、大洗サーフセービングクラブ	ライフセービング活動	195,000
教育学部	須貸マナ	大子町教育委員会、大子町役場、水戸市教育委員会、初原ぼっちの学校周辺の地域の方	廃校で行う､子ども宿泊体験プロジェクト　～in　初原ぼっちの学校～	329,000